

夢野久作

縊死体



登場人物

私（語り）

若い女

◆どこかの公園のベンチ。新聞記事を探す「私」。

どこかの公園のベンチである。

目の前には一条の噴水が、夕暮の青空高く高くあがっては落ち、あがっては落ちしている。

その噴水の音を聞きながら、私は二三枚の夕刊を拡げ散らしている。そうして、どの新聞を見ても、私が探している記事が見当たらないことがわかると、私はニツタリと冷笑しながら、ゴシャゴシャに重ねて押し丸めた。

私が探している記事というのは今から一箇月ばかり前、郊外の或る空家の中で、私に絞め殺された可哀相な下町娘の死体に関する報道であった。

私は、その娘と深い恋仲になっていたものであるが、或る夕方のこと、その娘が私に会いに来た時の桃割れと振袖姿が、あんまり美しく過ぎたので、私は息苦しさに堪えられなくなって、彼女を郊外の××踏切り附近の離れ家に連れ込んだ。そうして驚き怪しんでいる娘を、イキナリ一思いに絞め殺して、やっと重荷を卸したような気持ちになったものである。万一同うでもしなかったら、俺はキチガイになったかも知れないぞ……と思いながら……。それから私は、その娘の扱帯を解いて、部屋の鴨居に引っかけて、縊死を遂げたように装わせておいた。そうして何喰わぬ顔をして下宿に帰ったものであるが、それ以来私は、毎日毎日、朝と晩と二度ずつ、おきまりのようにこの公園に来て、

このベンチに腰をかけて、入口で買って来た二三枚の朝刊や夕刊に眼を通すのが、一つの習慣になってしまった。

「振り袖娘の縊死」

といったような標題を予期しながら……。そうして、そんな記事がどこにも発見されない事をたしかめると、その空家の上空に当る青い青い大気の色を見上げながら、ニヤリと一つ冷笑をするのが、やはり一つの習慣のようになってしまったのであった。

今もそうであった。私は二三枚の新聞紙をゴシヤゴシヤに丸めて、ベンチの下へ投げ込むと、バットを一本口に啣えながら、その方向の曇った空を振り返った。そうして例の通りの冷笑を含みながらマッチを擦ろうとしたが、その時にフト足下に落ちている一枚の新聞紙が眼に付くと、私はハッとして息を詰めた。

それはやはり同じ日付けの夕刊の社会面であったが、誰かこのベンチに腰をかけた人が棄てて行ったものらしい。そのまん中の処に掲してある特種らしい三段抜きのおおきな記事が、私の眼に電気のように飛び付いて来た。

空家の怪死体

××踏切附近の廃屋の中で

死後約一ヶ月を経た半骸骨

会社員らしい若い背広男

◆廃屋に向かう「私」。

私わたしはこの新聞記事しんぶんきじを掴つかむと、夢中むちゅうで公園こうえんを飛び出だした。そうしてどこをどうして来たものか、××踏切りふみき附近ふきんの思い出おも深いでぶか廃家はいかの前まえに来て、茫然ぼうぜんと突つつ立たっていた。

私わたしはやがて、片手かたてに掴つかんだままの新聞紙しんぶんしに気きが付つくと、慌あわてて前後ぜんごを見まわした。そうして誰だれも通とおっていないのを見澄みすますと、思い切おもって表おもての扉とを開ひらいて中なかに這入はいった。

空家あきやの中なかは殆ほとんど真暗まっくらであった。その中なかを探さぐり探さぐり娘むすめの死体したいを吊つるしておいた奥おくの八畳はちじょうの間まへ来て、マッチを擦すって見みると……。

私わたし「……………」

……それは紛まごう方かたない私わたしの死体したいであった。

バンドを梁はりに引ひっかけて、バットを啣くわえて、右手みぎてにマッチを、
左手ひだりてに新聞紙しんぶんしを掴つかんで……。

私わたしは驚おどろきの余あまり気きが遠とおくなって来た。マッチの燃えさしを
取り落おとしながら……これは警察当局けいさつとうきょくのトリックじゃないか……
といったような疑うたがいをチラリと頭あたまの片隅かたすみに浮うかめかけたようであったが、
その瞬間しゅんかんに、思おもいもかけない私わたしの背後うしろのクラ暗やみの中なかから、
若い女わかおんなの笑わらい声こえが聞きこえて来た。

それは私わたしが絞め殺しころした彼女かのじょの声こえに相違そつゐなかった。

女むすめ「オホホホホ……あたしの思おもいが、おわかりになって……」

〈完〉

1 場

縊死体：首を吊って死んだ遺体のことです。首を吊ったり、くくったりして死ぬことを縊死と言います。

一条：「条」は、川や道、布、煙など細長いものを数えるときに使います。噴水の噴き出す様子が細長く見えるため、「一条」と数えています。

郊外：都市の中心から少し離れた、人口の多い地域を指します。都市に働きに出る人々のための住宅地が広がっていることが多いです。

桃割れ：女性の日本髪のひとつです。10代後半の少女がよく結っていたもので、頭の後ろで髪をまとめ、2つの輪を作ります。まげの形が桃を半分に割った形に見えることから「桃割れ」と呼ばれました。少女らしさを感じる髪型だっ

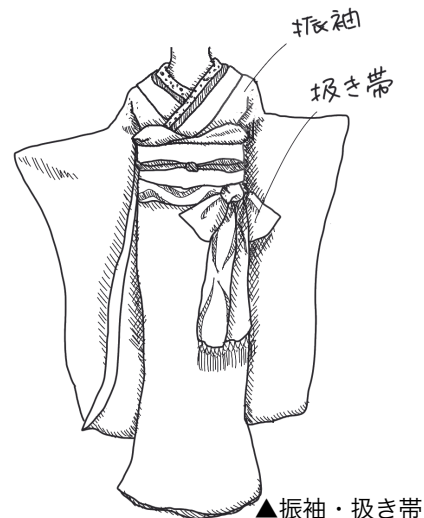


たのでしょう。昭和時代に入ってから、戦前までは日常的に結われることがあったようです。

振袖：江戸時代に発展した、袖が長い女性用の着物です。成人前の未婚女性の普段着でした。現代でも、未婚の女性の晴れ着として、成人式や卒業式などでよく着られますね。

扱帯：しごき帯のことで、通常「志古着帯」と表記します。もともとは、女性が着物の裾を身長に合わせるべくたくし上げるために使用し

た帯です。現代では、七五三、成人式、結婚式など盛装時に、飾りとして使用します。通常の帯の下で腰に締め、体の前または後ろで蝶結びをして垂らすのが一般的です。



キチガイ：通常「気違い」「気狂い」と書きます。精神が平常と異なる状態になり、常識から外れた言動をとることや、そうしたことをする人を言います。現代では不適切な言葉とされ、使われていま

せん。

鴨居：住宅の一部で、ふすまや障子をはめるために溝が設けられた枠の上側を指します。下側は「敷居」と呼びます。木でできていることが多いです。

バット：「ゴールデンバット」（英語で「金色のコウモリ」という意味）の略で、日本製タバコの銘柄です。です。明治39（1906）年に発売され、現在でも販売されています。「ピース」や「朝日」といった高級銘柄に対して、「ゴールデンバット」は安さが売りでした。



▲バット

特種：新聞や雑誌で、一社だけが抜け駆けして手に入れたニュースのことです。スクープとも言います。

三段抜き^{さんだんぬき}：新聞の紙面で、記事を大きく扱うために、三段分を使って見出しを組むことです。

電気のように飛び付く^{でんきのようにと飛びつく}：「電気のように」という慣用句はありませんが、例えば「電光石火のごとく」は、稲妻や閃光のイメージから、ほんの短い間や素早い動作を表します。ここでは、記事の内容が、主人公の目に、一瞬にして、閃光のごとく目に飛び込んで来た様子を表しているようです。

2場

見澄ます^{みす}：注意深く、よく見ること、見極めることです。

バンド：英語で、帯のことです。体に巻き付け、衣類を固定するための物です。ここでは、ズボンのベルトか、ズボン吊り（サスペンダー）を指していると考えられます。

燃えさし^も：途中まで燃えること、燃え切らずに残ることです。「燃え止し」と表記することもあります。

浮かめる^う：「浮かむ」という動詞の活用形です。「浮かむ」は「浮かぶ」、「浮かめる」は「浮かんでいる」または「浮かべる」という意味です。

Podcast ののラジオ
好評配信中！



視聴・購読はこちらから
<https://gekidannono.com/wp/archives/podcast>
ご意見・ご感想はこちらへ
radio@gekidannono.com

劇団ののと読む名作文学 夢野久作 ^{いしたい}
「縊死体」 Podcast 版

発行日 2018年8月1日
著者 夢野久作
編集 劇団のの
発行 劇団のの
[http://gekidannono.com/
radio@gekidannono.com](http://gekidannono.com/radio@gekidannono.com)

※本文は、青空文庫様掲載の原文を加工したものです。
底本 「夢野久作全集3」筑摩書房
出版年 1992（平成4）年8月24日
初出 1933（昭和8）年1月
図書カードURL
<https://www.aozora.gr.jp/cards/000096/card2377.html>

